

『保昌物かたり』の挿絵に関する予備的考察

—松会版『大坂物語』挿絵との比較を中心に—

位 田 絵 美

一. はじめに—『保昌物かたり』について

『保昌物かたり』は、平井保昌¹が仕える源頼光に対し、謀反を企てた藤原定重一派を、保昌の息子(きどう丸²)と頼光四天王の息子たち(子四天王)が中心となって成敗する物語である。きどう丸と子四天王たち若武者の活躍や、名将渡辺の綱の智略、保昌ときどう丸の親子の情愛が描かれる。

同書は、公益財団法人東洋文庫所蔵の三卷合二冊の版本である。本稿では、東洋文庫³所蔵の画像データを用いて分析を行う。『岩崎文庫貴重本叢刊〈近世編 第二卷 仮名草子〉』⁴に『保昌物語』として、影印版が収録されている。室木弥太郎編『金平浄瑠璃正本集』第三卷⁵、『假名草子集成』第六十二卷⁶に、それぞれ「解題」と翻刻を有する。管見の限り、本書は、東洋文庫所蔵本以外には確認できない貴重書である。

本稿ではおもに挿絵に対する分析を行う。詳細な書誌情報は、右にあげた二つの「解題」を参照いただくこととし、本稿に係りのあ

る挿絵情報とそれに関連する事項のみ掲載する。

挿絵 見開き挿絵七図、片面挿絵五図、合計十二図。詞書あり⁷。

上巻四図(二裏〜三表・五裏〜六表・九裏〜十表・十二裏)。

中巻四図(二裏〜三表・五表・七裏〜八表・十表)。

下巻四図(三裏〜四表・六表・八表・九裏〜十表)。

先述の室木氏は、「解題」で、次のように述べる(傍線引用者)。

本書は丁付等から判断して、元は上中下三冊であったと思われる。改装の時二冊に改めたのであらう。本書は挿絵を比較してみると、「三田八幡之由来」(金平浄瑠璃正本集・第一)所収、解題五二七頁参照)と非常に似てゐる。しかし全く同じではない。萬治四年(寛文元年)前後に上方で刊行されたのであらう。恐らく「鬼藤籠やふり」(大和守日記)による)が行はれて間もなく、それを讀み物風に整へて出したもので、本来は浄瑠璃であらう。

室木氏は、『保昌物かたり』を「万治四(一六六一)年前後に上方

で刊行された」と推定する。同氏が「挿絵が似ている」という『三田八幡之由来』との比較は、大変興味深いが別稿に譲り、本稿では明暦四（11万治元、一六五八）年刊と、寛文八（一六六八）年刊の二つの松会版『大坂物語』の挿絵との比較を行いたい。松会版『大坂物語』の挿絵と比較を行う理由は、二つある。一つは、江戸版である寛文八年刊の『大坂物語』と、室木氏が上方版であると述べる『保昌物かたり』の挿絵に、多くの共通点があることに気づいたためである。もう一つは、『保昌物かたり』の刊行は、松会が刊行した明暦四年『大坂物語』⁹（以下、明暦版『大坂物語』と呼ぶ）と寛文八年『大坂物語』¹⁰（以下、寛文版『大坂物語』と呼ぶ）の間に位置しており、両者の相違に『保昌物かたり』が及ぼした影響が見て取れるためである。

『保昌物かたり』の挿絵の問題は複雑で、本稿の分析のみで完結するものではない。そのため、本稿ではその予備的考察として、『保昌物かたり』と松会が刊行した『大坂物語』の挿絵の相違点・共通点から、何が見えてくるのかを明らかにしたい。

二 『保昌物かたり』の挿絵比率と半丁あたりの行数

まず、挿絵分析の手始めに、『保昌物かたり』の挿絵比率（本文に対する挿絵の量）を確認する。元は三冊であった『保昌物かたり』は、現在、上冊十九丁、下冊十七丁に改装され、全三十七丁である。挿絵は第一節であげたように、見開き挿絵七図、片面挿絵五図、合

計十二図であるから、本文に対する挿絵比率は、約26%である¹¹。明暦版と寛文版の『大坂物語』の挿絵比率が、それぞれ12%と17%であるから、『保昌物かたり』の挿絵比率は、かなり高いといえる。

筆者はこれまでの仮名草子の挿絵分析研究で、挿絵比率が刊行時期によって異なることを確認済みである¹²。具体的には、寛永正保までの上方版は約10%、明暦頃の初期の江戸版で12%前後、寛文頃の全盛期の江戸版で17%前後まで上がり、それを頂点にして徐々に減少する傾向があることがわかつている。したがって、寛文期の江戸版の約1.5倍の挿絵比率を持つ『保昌物かたり』が、いかに特殊な存在であったかがわかる。ただし、この挿絵比率をもって、『保昌物かたり』を上方版、江戸版と断定することは難しい。

仮名草子ではないが、参考までに、これまでの分析で最も挿絵比率が高かったのは、享保三（一七一八）年に上方で刊行された西村屋版『大坂物語』の32%である。同書には、浄瑠璃本の影響が強く見られ、古浄瑠璃風の詞章を多く含む『保昌物かたり』との関連性が疑われる。今後、浄瑠璃本の影響を受けた作品の挿絵分析を続けることで、挿絵の特徴や挿絵比率の高さを証明できる可能性がある。

次いで、『保昌物かたり』の半丁あたりの行数について確認する。

一般に、整版の行数は、作成経費の削減と彫刻技術の向上から、時代が下るにしたがって増加する。寛永正保期の上方版は十一行から十二行が主であり、明暦万治期の江戸版の行数も同程度ものが多く見られる¹³。寛文期の江戸版になって十四行が一般的となり、

延宝期以降十六行が確認できる。尤も求版の場合、元の本文はそのままで使用し、挿絵だけを差替えることがあるので、その場合は、時代が下っても十二行のケースも見られる。

ところで、『保昌物かたり』は半丁あたり十一行である。室木氏が述べるように「万治四（一六六二）年前後に上方で刊行された」¹⁴本としては、半丁十一行の状況に齟齬はない。だが、万治四年頃であれば、江戸版にも十一行、十二行の本が見られるので、これだけで『保昌物かたり』が上方で刊行された本であるとは断定できない。

次節から、具体的に『保昌物かたり』の挿絵を取り上げ、『大坂物語』の挿絵との比較を行う。寛文版『大坂物語』の挿絵との共通点は、①モチーフ（人物・物）の類似、②構図の類似、③描写の類似の三点があげられる。

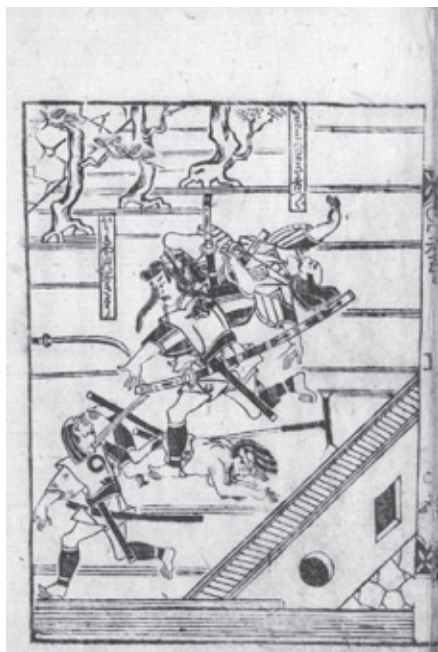
三、『保昌物かたり』の挿絵―①モチーフ（人物・物）の類似

本節では、『保昌物かたり』と寛文版『大坂物語』の挿絵の①モチーフの類似について分析する。図1に『保昌物かたり』上巻五丁裏く六丁表、図2に寛文版『大坂物語』上巻十七表の挿絵を掲載する。

図1は、きどう丸が藤原定重謀反の企みを知り、定重の城の様子を探っていた際に、定重一派の「岩がみ八りき」に見咎められ、大暴れして追手を振り切る場面である。右画面の若衆鬘がきどう丸で、彼が右腕で抱えあげているのが八りきである。左画面が定重の城であり、城の番の者は八りきと呼ばれて、きどう丸に駆け寄ったが、

彼の大立ち回りに恐れをなし、城門に向けて逃げている。

図1 「きどう丸、大立ち回りの図」¹⁵



〔保昌物かたり〕上巻五丁裏く六丁表（公財）東洋文庫蔵

図2 「大坂城攻め（冬の陣）」見開きのうちの左半分



（寛文版『大坂物語』上巻十七丁表）

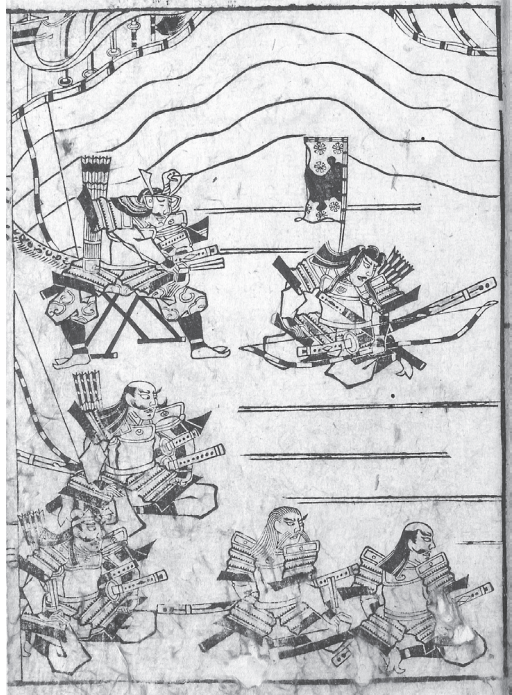
図2は寛文版『大坂物語』の「大坂城攻め（冬の陣）」の左半分である。画面の左上に描かれるのが、大坂城である。

図1と図2のモチーフの類似として注目したいのは、図1の城や門の屋根の上の黒い鯨、白壁の大きな狭間、その下の石垣の描き方である。図2の『大坂物語』の挿絵と類似していることがわかる。

同じくモチーフの類似として、人物の顔の描き方に注目したい。

図1のきどう丸は、前髪を長く垂らし、眉が上がり、目を見開き、口角を下げた怒り顔である。この顔と、図3にあげる『大坂物語』

図3 「秀頼の天王寺出馬」見開きのうちの左半分



（寛文版『大坂物語』下巻三丁表）

の若武者の顔を見比べていただきたい。大将秀頼の前に跪く若武者は、顔の向きは異なるが、『保昌物かたり』のきどう丸と瓜二つである。実はこの眉が上がって目を見開いた（黒目がある）顔は、『大坂物語』では珍しい表情である。大半の表情は、図2を見てもわかるように、図3の大将秀頼のような描き方で、眉は反り上がるが、黒目はない。寛文版『大坂物語』では、九十七の顔（頭・首）が描かれるが、このうち目を見開くのは十人だけである。比率的には、10%しか目を見開いていない。つまり、図3のように、登場する武士の

八割以上が目を見開いている挿絵は、大変珍しいものである。

図3の秀頼に代表される目の描き方は、上方版の『大坂物語』から引き継がれたもので、初期の江戸版である明暦版『大坂物語』も、四十八の顔(頭)のうち、四十七(約98%)が黒目がない顔である。一方、『保昌物かたり』の人物の顔は、その大半が目を見開いて(黒目がある状態で)描かれる。七十九の顔のうち、六十八が黒目のある顔であり、86%の比率となる。

ここで、『保昌物かたり』のなかの保昌の顔を確認する。図4に『保昌物かたり』上巻九丁裏く十丁表を掲載する。源頼光が病に伏し、頼光の弟頼信、保昌、四天王が伺候する大広間に、きどう丸が藤原定重の謀反を告げにきた場面である。左画面の上座に床に臥す頼光、枕元に頼信、中央に座す総髪の人物が保昌である。彼の髪型、毗を結して口を引き結んだ表情に注目したい。この表情は、図3の寛文版『大坂物語』の画面手前、右から二人目の人物と酷似していることがわかる。同様に『保昌物かたり』の渡辺の綱や、末武、定光らの顔も、図3の武将たちに大変よく似ている。

第三節の小結として、『保昌物かたり』と寛文版『大坂物語』の挿絵のモチーフの類似についてまとめる。特に顕著な類似点は、黒目のある顔であった。この比率を成立順に整理すると、明暦版『大坂物語』2%、『保昌物かたり』86%、寛文版『大坂物語』10%となる。明暦版と寛文版は、同じ松会開板の『大坂物語』で、その間は僅か十年であるが、十年の間に、元は2%しかなかった目を見開く(黒

図4 「頼光の病床に伺候する頼信、保昌、四天王の図」



『保昌物かたり』上巻九丁裏く十丁表(公財) 東洋文庫蔵

目がある)顔が、五倍の10%になる。他の『大坂物語』には、上方版・江戸版を含め、黒目のある顔がほぼ登場しないことを勘案すると、『保昌物かたり』の挿絵ないしはその製作者が、松会の寛文版『大坂物語』の挿絵に、何らかの影響を与えた可能性は十分に有り得る。

四 『保昌物かたり』の挿絵②構図の類似

続いて『保昌物かたり』と寛文版『大坂物語』の挿絵の類似点として、構図の類似をあげたい。図5に『保昌物かたり』中巻五丁表から、「八屋藏人先陣の図」を掲載する。

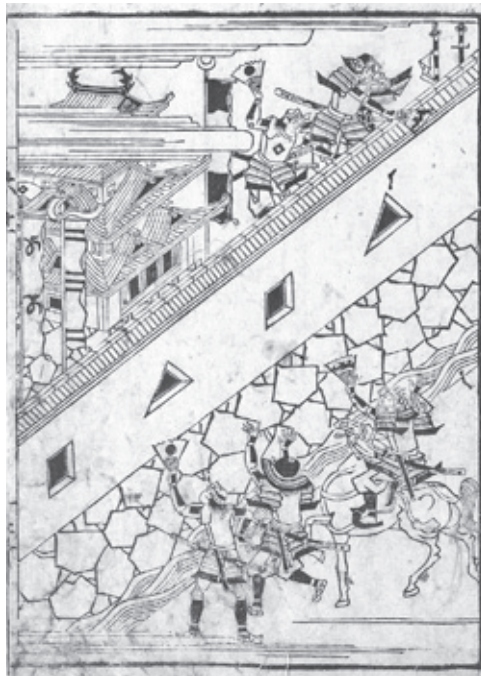
図5 「八屋藏人先陣の図」



『保昌物かたり』中巻五丁表 (公財) 東洋文庫蔵

定重謀反の討伐に、先陣の名乗りをあげた八屋藏人を、城内から定重一派の大部坊範然、すどう左衛門が見下ろす場面である。八屋は役者不足で早々に敗退するが、注目したいのは、この城内から城壁を挟んで相手を見下ろす構図である。図6に寛文版『大坂物語』上巻二十丁表より「扇招き」の挿絵をあげる。

図6 「扇招き」



(寛文版『大坂物語』上巻二十丁表)

図5と図6の構図を比較すると、いずれも片面挿絵で、画面の中央左下から右上に斜めに白い城壁が配置され、瓦の載った屋根、大きな狭間、その下に石垣が描かれる。堀のあるなしは別として、左上が城側、右下が攻める側の騎馬武者とその郎党の構図が共通する。

この構図が、江戸時代の合戦物の挿絵としては定番のものであった可能性もあるが、両者の構図に類似点があることは間違いない。

続いて、もう一例、構図の類似例をあげる。図7に『保昌物かたり』上巻二丁裏〜三丁表から藤原大館判官定重とその一派の挿絵を、図8に寛文版『大坂物語』上巻九丁裏〜十丁表から「秀頼と大坂方武将図」を掲載する。

図7から説明する。左画面の上座にいるのが安房・上総管領の藤原定重である。定重は、城の大広間で酒宴を開き、参謀役の大部坊範然、その弟の八りき、郎党の新四天王（すどう左衛門とう平、石橋二郎元綱、あら川平馬宗高、しん藤兵へ友行）らに、謀反の企みを打ち明ける。冷静にその話を聞き、諫めようとした小林六郎は、定重の逆鱗に触れ、大部坊に捕らえられ、右画面で首をねじ切られて殺害される。

図8の寛文版『大坂物語』は、「秀頼と大坂方武将図」である。こちらも舞台は大坂城の大広間である。左画面の上座に大将秀頼その前に大野修理、真田左衛門佐、後藤又兵衛ら、おもだった将が居並ぶさまを描いている。図8は酒宴の場ではないので、図7のような酒肴や酌人は居らず、またすべての将が鎧を身に着けている。

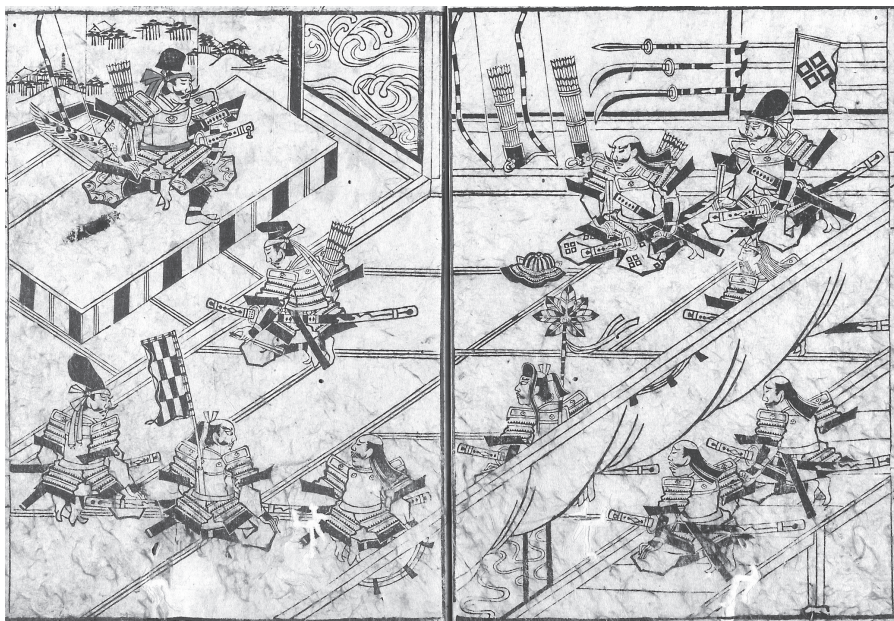
ここで注目したのは、構図の類似点である。いずれも右斜め上から大広間を見下ろした視点で描かれ、左手の上段の間に主人（定重・秀頼）が座し、右手前に板張りの外縁がある。図7、図8ともに、この見下ろす角度にも大きな差はない。また、上段の間と大広

図7 「藤原大館判官定重とその一派」



『保昌物かたり』上巻二丁裏〜三丁表（公財）東洋文庫蔵

図8 「秀頼と大坂方武将図」



(寛文版『大坂物語』上巻九丁裏〜十丁表)

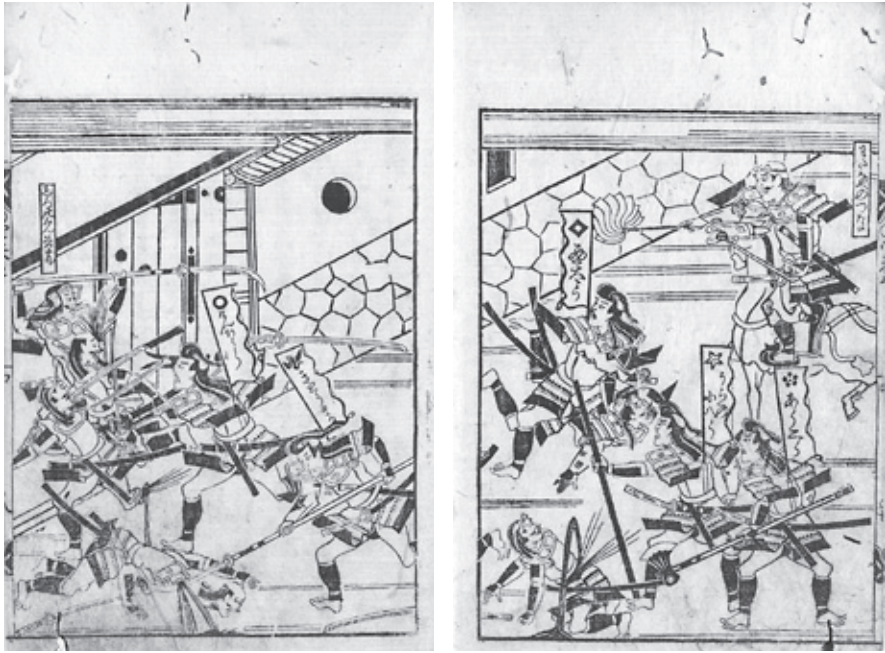
間の敷居と奥の襖の角度は、『保昌物かたり』が145度、『大坂物語』が148度である。実際の建物では有り得ないものだが、その場の主役である定重や秀頼の表情がはっきりと見て取れる工夫として、共通している。その他の人物の配置も、上段の間に向かって左右に居並ぶ将が描かれる点と同じである。畳の縁の描き方、外縁の下の柱が一本描かれている点まで、大変よく似ている。以上の分析から、図7『保昌物かたり』と図8寛文版『大坂物語』の挿絵の構図には、明確な類似点があることがわかる。

五. 『保昌物かたり』の挿絵—③描写の類似

『保昌物かたり』と寛文版『大坂物語』の挿絵の類似点として、最後に描写の類似を取りあげたい。本節で分析するのは、「流血場面」の描き方である。

図9に『保昌物かたり』中巻七丁裏〜八丁表から、きどう丸と子四天王の初陣の図をあげる。右画面では、騎乗の渡辺の綱が、采を振り「駆けよ、駆けよ」と下知する。定光の息子の荒二郎は、斧で敵兵の腰を叩き割り、大量の出血がある。公時の息子の悪太郎は鎧姿の敵将を組み敷き、季武の息子小八郎は棒を持って走り寄っている。左画面は定重の城門前で、渡辺の嫡男源二郎が太刀を振りかざし敵の額を叩き割り、血が噴き出している。保昌の息子きどう丸は長刀で逃げる敵兵の右足を切り落とし、その勢いのまま、別の兵士の首をも切り落としている。辺りには激しく血潮が飛び散っている。

図9 「きど丸と子四天王の初陣の図」



『保昌物かたり』中巻七丁裏〜八丁表（公財）東洋文庫蔵

このような「流血場面」は、『保昌物かたり』ではいくつも見られる。延べ八六人の人物が描かれる中、流血する人物は十一人おり、比率として約13%に上る。この数字が、いかに多いのかを確認するため、『大坂物語』の「流血場面」の比率を確認した。延べ何人の人物が描かれ、そのうち何人が流血しているかで計算する。

じつは、大坂冬の陣、夏の陣を描いた合戦物語であるにも拘わらず、『大坂物語』の挿絵には、我々が想像する以上に「流血場面」は登場しない。例えば、上方版である寛永無刊記版および正保三年版の『大坂物語』には、「流血場面」は一ヶ所もない。それが秀頼の切腹場面であっても、不自然なほど血飛沫は描かれない。

正保三年版の挿絵をほぼそのまま写し取った、初期の江戸版である松会の明暦版『大坂物語』にも、当然「流血場面」はない。同年刊行の本屋久次郎版『大坂物語』になって、漸く「流血場面」が登場するものの、二三〇人描かれる人物の中で流血しているのは、わずか一名の切腹シーンのみである。比率にして0.4%に過ぎない。

松会と同じ寛文八（一六六八）年に刊行された問屋版『大坂物語』には、秀頼切腹場面以外に、一ヶ所だけ存在するが、それでも「流血場面」の比率は2.5%弱である。この数値から、実際に起きた合戦を描く作品ではあっても、従来の『大坂物語』では「流血場面」が描かれることは、ほぼなかったことが明らかにわかる。

そのなかで、松会が刊行した寛文版『大坂物語』は、それまでの『大坂物語』の挿絵にはなかった残虐性、過激性、躍動感を有して

いた。当然、「流血場面」の比率も上がり、5.5%になる。

実際に、どのような描写なのかを確認するために、図10に、寛永版『大坂物語』上巻二丁裏〜三丁表から、「関ヶ原合戦の図」をあげる。合わせて、同じ場面が、十年前の明暦四（一六五八）年にはどう描かれていたのか比較するために、図11に、明暦版『大坂物語』上巻三丁裏〜四丁表から「関ヶ原合戦の図」を掲載する。

図10寛文版『大坂物語』から解説する。右画面では、刀を振り切った武者が、騎乗の敵を切り落として落馬させている。まだ馬上に残る胴体からは、激しく血飛沫が吹き上がる。左画面でも、長刀を振るう武者が、やはり騎乗の敵の首を切り落とし、血柱が立っている。主を失った馬が棹立ち、周囲の阿鼻叫喚が聞こえてくるようだ。

一方、図11の明暦版『大坂物語』をご覧いただきたい。明暦版『大坂物語』は、先行する上方の正保三年版『大坂物語』の挿絵を、そのまま写し取った内容であることは先に述べたが、寛文版とのあまりの相違に、驚きを隠せない。左右から大坂方と徳川方の軍が睨み合う様子が描かれるが、静止画面のようであまり動きが感じられない。数は多いが、全体的に人物が小さめで、いずれも無表情で読者を引き込むような魅力がない。明暦頃は、まだ二代目松会市郎兵衛の駆け出し時期の刊行であったことを差し引いても、下絵・彫刻技術ともに、稚拙な印象を拭えない。

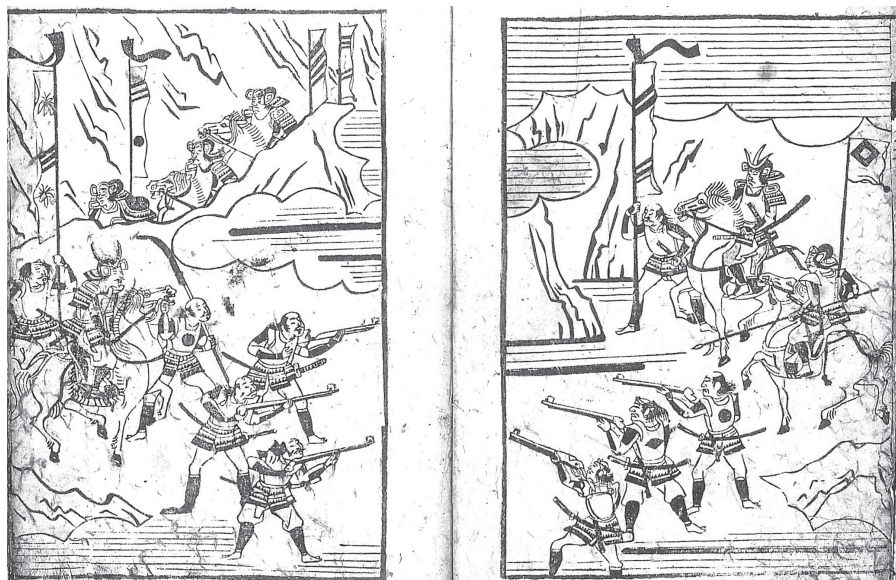
だが、それが十年の時を経て寛文八（一六六八）年の『大坂物語』になると、このように躍動感溢れる挿絵に変化している。両者には

図10 「関ヶ原合戦の図」



（寛文版『大坂物語』上巻二丁裏〜三丁表）

図11 「関ヶ原合戦の図」



〔明暦版『大坂物語』上巻三丁裏〜四丁表〕

同じ松会開板とは思えないような、挿絵に明白な相違が見られる。

第五節の小結として、『保昌物かたり』と寛文版『大坂物語』の挿絵の類似点に話を戻す。「流血場面」の比率は、寛永無刊記版・正保三年版・明暦版『大坂物語』では、0%。本屋久次郎版『大坂物語』で0.4%。問屋版『大坂物語』で2.5%弱であった。それが、寛文版『大坂物語』になって、5.5%に急増する。数値から見れば、たかが5.5%に思えるかもしれない。しかし、その挿絵の内容を確認すると、同じ松会開板の明暦版と寛文版の挿絵には、誰の眼にも明らかな相違があった。両者の間に『保昌物かたり』の「流血場面」、比率にして約13%が存在する点に注目したい。

同じ寛文八年刊行の『大坂物語』であるのに、問屋版は2.5%弱の「流血場面」しかないのに、松会の寛文版にはその倍以上の5.5%の「流血場面」が存在する。ここからも、『保昌物かたり』と寛文版『大坂物語』の挿絵には、その描写方法に類似点があると言えよう。

六 おわりに―結びにかえて

本稿では、『保昌物かたり』の挿絵を、松会開板の寛文版『大坂物語』の挿絵と比較しながら、両者の類似点を分析した。分析を始めるまでは、両者には、江戸初期に刊行された戦物語という共通点しかないように思えたが、実際には、①モチーフ（人物・物）、②構図、③描写など、さまざまな類似点があることが判明した。

上方版挿絵の影響を強く受けた明暦版『大坂物語』の挿絵が、独

自の江戸版挿絵を有する寛文版『大坂物語』に至るまでには、何らかの挿絵の影響を受けたと思われる大きな変化が見られ、これまではその影響を及ぼしたものはつきりとしていなかった。だが、今回の分析を通じて、人物の黒目のある表情や、躍動感あふれる「流血場面」など、『保昌物かたり』との類似点が目白となった。直接的あるいは間接的に、『保昌物かたり』の挿絵の作者、あるいはその元で活躍していた下絵師・彫師が、寛文以降の松会版の製本に携わった可能性がある。

今後、同じような江戸初期の作品の挿絵を分析することで、その精度を高め、挿絵解釈研究をより推進していきたい。

【注記】

- 1 藤原南家の致忠の子。撰津平井の里に住し、平井氏を名乗る。藤原保昌とも。本稿では、平井保昌で統一する。肥後・大和。丹波・撰津などの国司を歴任した。大盗賊袴垂が保昌の武威に威圧された話（『今昔物語集』）は有名。酒呑童子を退治した、羅生門の鬼退治に渡辺の綱を赴かせたなどと伝わる。『保昌物かたり』では源頼光の信頼厚い従兄で、頼光の右腕となる人物として描かれる。
- 2 『保昌物かたり』では、保昌の嫡子の設定。「鬼同丸」、「鬼童丸」の表記が考えられるが、『保昌物かたり』では「きどう丸」で統一されているため、本稿でもそれに倣う。『古今著聞集』には、京の盗賊として登場し、源頼信に捕らえられ、その兄頼光を恨んで、脱走した後待ち伏せするが、かえっ

て頼光に誅せられたと記載される。

- 3 『保昌物かたり』絵入 三巻二冊 「請求記号 三F一あろ150」。本稿で使用する『保昌物かたり』の挿絵は、すべて公益財団法人東洋文庫蔵本からである。
- 4 財団法人東洋文庫・日本古典文学会監修・編集『岩崎文庫貴重本叢刊（近世編）第二巻 仮名草子』（一九七四年 貴重本刊行会）。こちらの書名は、『保昌物語』である。
- 5 室木弥太郎編『金平浄瑠璃正本集』第三巻（一九六九年 角川書店）。ここの書名は『保昌物語』である。同書からの引用の際には、『保昌物語』を使用する。翻刻は、46頁〜66頁。「解題」は、621頁〜622頁。
- 6 柳沢昌紀・飯野朋美・伊藤慎吾・安原眞琴編『假名草子集成』第六十二巻（二〇一九年 東京堂出版）。書名は『保昌物語』。翻刻は、266頁〜288頁。「解題」は、295頁〜297頁。
- 7 注6「解題」でも触れているが、挿絵中に誰を描いたかの詞書がある。『大坂物語』の挿絵で、このような詞書が記されるのは、明暦四年本屋久次郎版およびその求版だけである。本屋版は、まだ初期の江戸版が確立する以前の本地で、江戸版らしい特徴をほぼ持たない珍しい挿絵を有する。詳細は、拙著『挿絵解釈の研究——『大坂物語』を中心に』（二〇二〇年 和泉書院）、第一章および第四章を参照。
- 8 『保昌物かたり』は、元は上中下の三巻本であるので、挿絵は、上中下で分けて記載した。注4の『仮名草子』では、上下の丁数で記載する。
- 9 明暦四年松会版『大坂物語』は、架蔵本を使用。

10 寛文八年松会版『大坂物語』は、大阪府立中之島図書館蔵、上下二冊本（請求番号 朝日二五五・二二一）を使用。
助成金（基礎研究（C）〔課題番号二〇K〇〇九九二〕の助成を受けて行われているものである。

11 見開き挿絵を1、片面挿絵を0.5で考えると、挿絵は9.5図。『保昌物語』の総丁数は37丁なので、^{0.256}。挿絵比率は、約26%となる。以下、比率の計算方法はみな同じ。

12 『大坂物語』各版の挿絵比率については、前出、注7の拙著、序章・第一章ほか参照。なお、同書では、従来の「江戸版」を「狭義の江戸版」と捉え、その前の初期江戸版を「黎明期の江戸版」、その後のものを「混迷期の江戸版」と位置付けた。

13 注7、拙著参照。初期の江戸版では、上方版をそのまま使用せず、本文を新たに彫直し、挿絵も付け替えて刊行されている。

14 前出、注5、「解題」622頁。

15 挿絵タイトルは、本文内容と挿絵場面合わせて、適宜作成した。以下、同じ。

【謝辞】

本稿掲載の画像資料は、図1・図4・図5・図7・図9が公益財団法人東洋文庫に所蔵本であり、図2・図3・図6・図8・図10が大府立中之島図書館に所蔵本である。本稿の資料の調査・掲載にあたり、御許可を賜りました関係諸機関に、この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

【付記】

本研究は、令和四（二〇二二）年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金